

涙の流速について

小幡曜

たまに泣いてしまうときがある
目をこすってみると

涙の軽さに驚く

眺める涙はもっと重かったはずで
顔の縁をつたうことさえできなかった

涙

川で化石を探している、その胃の中から
水の音がする

瓢箪の内に溶けていくように、
冬の川の含意が聞こえた

ヒンヤリとしたものに手首を撫でられて
血を遡上していく

（血縁者の軽微な水難がモニタージュされる）

背中をひとしきり冷たいものが滴ったあと
河川敷の焚火の痕が息を吹き返し

埋められた不法投棄の自転車が這い出てくる

感情が感情の淵をなぞっていく
だから、すこし泣いていた